

《新会員のひと言》

入会のご挨拶 合掌とともに

村田 譲



献血とソシアルダンスが趣味の村田と申します。今回入会する理由を考えると、斉藤征義さんのおかげ・ではなかろうかと思う下さい。

私は朗読が好きですが、詩の朗読イベントは少ないのです。しかし、短歌とか読み聞かせとか、ジャンルにこだわらなければ色々ある。でも、まったく知らない人ばかりというのもシャイな私としては気が引ける。そこで知ってる名前をググってみると、斉

藤征義という名前は高い頻度ででてきて、ポーランド文化協会もそのひとつでした。いざ会場に足を運ぶと、長屋さん、ムラサキさん、霜田さん、菅原さんなど知ってる名前が多い気が…(笑)。

ですから、ポーランドについては知らないことの方が多。まあ、WWII での国家分割からの不死鳥のような独立とか、スバルキギャップといわれる地政学の問題を抱えているとか、スタニスワフ・レムの惑星「ソラリス」での生きている惑星という発想が、地球をひとつの生命体と考えるイギリスのジェームズ・ラブロックが提唱した「ガイア仮説」と同じ匂いがするとか、その程度のイメージしか知らないです。そういうことで「ポーランド・ビギナー」入会です。まずはミウオシュ、そのときの『世界』から。

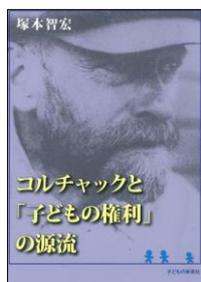
(むらた・じょう)

《新刊紹介》『コルチャックと「子どもの権利」の源流』 塚本智宏著、子どもの未来社、2019.6

本書は、子どもの権利条約の精神的起源の一人として注目されてきたポーランドのヤヌシュ・コルチャック(1878~1942)の子どもの権利探究の過程の解明を目標として、筆者の習作『子どもの権利の尊重』(2004)を大幅に書き改めたものである。コルチャックは何を考えながら子どもの権利保障を、それもどんな権利保障を探求していたのか、現代の子ども福祉や教育などの問題に携わり、その権利の実現や前進を切望する人々にとって興味深い考察が行われている。

本書は、前著のあとに新たに視野を広げ、その背景にあったヨーロッパの子ども歴史やコルチャック以外の子ども権利史のパイオニアたちの思想や活動を描き出している。最近の国際的な子どもの権利史研究の動向にも触発されながら、コルチャックへの影響が見られるロシア革命時のヴェンツェリの思想や活動や、国際的な宣言・条約等の制度創設への直接的な足がかりとなった 1924 年ジュネーブ子どもの権利宣言の立役者イギリスの E・ジェブの活動や思想についての新たな知見を示し、当時の法律家、医者、教育家、社会福祉活動家が直面していた「子どもの権利」概念の多様な源流を発掘、紹介している。

本書は前著の後継書として、コルチャックのことを知りたいさまざまな初学者にとって手ごろな入門書ともなっている。コルチャックという人物を手短に知りたい人(⇒第 I 部第 1 章の 2)、アンジェイ・ワイダ監督の映画『コルチャック先生』で有名な



“最後の行進”に関心がある人(⇒第 I 部第 2 章)、コルチャックの子ども・教育思想についてコンパクトに知りたい人(⇒第 III 部第 3 章)、そしてコルチャックが書いた原典を読みたい人(⇒資料)など。

本書をテキストに、昨年刊行した『“子どもに”ではなく“子どもと”～コルチャック先生の子育て・教育メッセージ』(かりん舎)を参考書にして、勤務校で“アイデンティティと共生”という題目で、大人と子どもの共生を主題としてコルチャックの生涯と業績について講義を行った。ヴィクトル・ユゴーの『レ・ミゼラブル』で提起される人類愛の課題と若きコルチャックの隣人愛思想、レミゼの中の有名な少年、孤児ガヴローシュへの注目など…映画を引用しながら楽しい授業になった(少なくとも主観的には…)。

(塚本智宏、東海大学札幌キャンパス教授・本会会員)

【目次】

- 第 I 部 コルチャックとはだれか
 - 第 1 章 コルチャックの生涯と業績
 - 第 2 章 「最後の行進」伝説の虚像と実像
- 第 II 部 国際的な子どもの権利史の幕開け
 - 第 1 章 1924 年ジュネーブ宣言の成立と子どもの権利—E・ジェブと子どもの権利宣言
 - 第 2 章 ロシア革命とヴェンツェリの子ども権利宣言
- 第 III 部 コルチャックの子ども権利思想と実践
 - 第 1 章 “子ども=すでに人間”思想の誕生と発展
 - 第 2 章 子どもの権利思想と実践—探究のプロセス
 - 第 3 章 コルチャックと現代—コルチャックを読む
- 年譜 コルチャックの作品と生涯
- 資料 コルチャック『子どもの尊重される権利』1929
- 文献リスト